

2006年4月13日

言語研究センター 研究セミナー発表

「～ンジャナイ (カ)」の用法間における連続性について

言語教育研究科日本語教育学専攻 博士後期課程1年

木村麻里

1. はじめに

「～ンジャナイ (カ)」の用法については、先行研究の概観から、〈否定〉、〈推量〉、〈確認要求〉と呼べる3種を取り出すことができる。先行研究に見られる傾向としては、推量用法と確認要求用法についての考察が多く、安達(1992)、三宅(1996)、宮崎(1993、1996、2005)などの研究が挙げられる。このような傾向はつまり、「～ンジャナイ (カ)」の3用法について、用法間における連続性という視点から論じようとするとき、否定用法についての考察が十分でないことを意味している。そこで本発表では、「～ンジャナイ (カ)」の否定用法についてその意味機能を概観し、さらに用法間の連続性という観点に立って、否定用法と推量用法間の連続性について論じる。

2. 先行研究

否定用法と推量用法の連続性について触れられた先行研究は限られているが、ここでは田野村(1988)と野田(1997)による見解を比較する。野田(1997)は、「の (だ)」の機能を考察する中で、推定の「のではない (か)」とは、「の (だ)」の否定形「のではない」が独自の用法を発達させたものであると述べている。推定の「のではない (か)」とは、本稿で言う推量用法に、「の (だ)」の否定形「のではない」とは、本稿で言う否定用法に当たるものと考えられる。独自の用法を発達させたということは、推定の「のではない (か)」と否定の「のではない」の連続性は弱いことを示唆している。野田(1997)が挙げる否定用法と推量用法の具体的な例は以下のようなものである。

- (1) お腹が痛いんじゃない。頭が痛いんだ。(野田 1997 p108)
- (2) 「あいつ、ここでタクシーでも拾ったんじゃない？」(宮部みゆき『パーフェクト。ブルー』p.79) (野田 1997 p109)

続いて、田野村(1988)の見解であるが、推定を表現する「ではないか」と、「ない」が否定辞本来の働きをする「ではないか」の相違は小さく、両者には連続性があると言う。田野村(1988)が挙げる否定用法と推量用法の例は以下のようなものである。

(3) (1は素数でないことを教えられて) そうか、1は素数じゃないか。(田野村 1988 p.17)

(4) (1ガ素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ) 本当に1は素数じゃないか? (田野村 1988 p.17)

(5) (空模様を見て) 雨でも降るんじゃないか? (田野村 1988 p.17)

田野村(1988)は、(3)~(5)の「ではないか」について、両者は連続するものと述べている。両者は「～ンジャナイ (カ)」の否定用法と推量用法という同じものを見ているはずだが、何故ここに見解の差異が生まれるのだろうか。ここで(1)と(3)および(4)を比較すると、野田(1997)と田野村(1988)が否定用法と見ているものに若干のずれがあることがわかる。(3)と(4)は「～ンジャナイ」という形式に終助詞や上昇調のイントネーションを伴っており、これを(1)のように「～ンジャナイ」という形式で下降調のイントネーションで発話すると異なった捉えられ方をする。すなわち、(1)と(3)、(4)は「～ンジャナイ (カ)」の否定用法というカテゴリーにおける下位分類を認められる可能性を示している。野田(1997)と田野村(1988)が推量用法と比較した否定用法は、それぞれに異なった論理構造を持つ形式であることが考えられるのである。この仮定が正しければ、田野村(1988)で提出されたような否定用法と推量用法の間に連続性が見られることになる。

本稿では、以下、(1)のような形式を「～ンジャナイ」、(3)や(4)のような形式を「～ンジャナイカ」と表記し、それぞれの意味機能について考察した後、それぞれが推量用法と連続性を持つか否かについて考える。

3. 「～ンジャナイ」の意味機能

3-1. 否定形式としての無標、有標

「～ンジャナイ」は、話し手の否認判断を表す形式である。しかし、動詞や形容詞の否定形を用いても否認判断を表すことはできる。次に挙げる(6)と(7)で、否定述語と「～ンジャナイ」の対立を見ると、「～ンジャナイ」が、否定の形式として有標であることがわかる。なお、記号 [?] はその文および文脈での使用が不自然であることを表し、記号 [??] はその文および文脈での使用が不自然であることを表す。

(6)a: 「太郎は車を買うの？」

b: 「?? 買うんじゃないよ。太郎は運転免許も持っていないんだよ。」

b': 「買わないよ。太郎は運転免許も持っていないんだよ。」

(7)a: 「太郎は車を買うの？」

b: 「太郎が買うんじゃないよ。次郎が買うんだって。」

b': 「買わないよ。次郎が買うんだって。」

(6-a)と(7-a)は同じ文であり、「太郎が車を買う」という命題の真偽を問うものである。そして、この命題において、真であるのは「太郎が車を買う」こと、偽であるのは「太郎が車を買わない」ことである。まず(6)の文脈であるが、(6-b)は、前件と後件との共起が意味的に不自然である。後件は「太郎が車を買う」という命題が偽であることを前提としており、「運転免許も持っていない (のだから、車を買うはずがない)」という内容で、命題全体が否定されることの補足を表している。これに対し、自然な返答として許容される(6-b')は、その前件が「太郎が車を買わない」ことを表す文であり、これは命題全体が否定された状態であるから、後件との意味的なつながりは自然である。つまり、否定述語を用いる場合は否定として無標である場合と言え、「～んじゃない」は無標の否定を表せないことが確認できる。続いて(7)の文脈であるが、(7-b)は車を買うのが太郎ではなく、次郎であることを述べる文であり、「太郎が車を買う」という命題の一部、ここでは「車を買う」行為をする人物についての否認を表すものである。また、否定述語を用いた(7-b')も許容されるが、これは「太郎が車を買う」という命題全体をいったん否定し、後件で新たに「次郎が車を買う」という命題を提出するという構造であるから、やはり無標の否定であることに変わりはない。否定述語を用いた文との比較から、「～んじゃない」は否定の形式として有標であり、ある命題の一部を焦点化して否定するという機能を持つことがわかる。

3-2. 対比性の含意

「～んじゃない」を用いた文には、対比性の含意 (implicature) がある。(8)、(9)で確認する。

(8)a: 「安いからってそんなに買ったら無駄だよ。」

b: 「安いから買ったんじゃないよ。備蓄用にしようと思ったからたくさん買ったんだ。」

(9)a: 「あの人って優しいですね。」

b: 「あの人は優しいんじゃない。優柔不断なだけだ。」

(8)、(9)はいずれも、「～ンジャナイ」を含む前件と後件から成り立っていることがわかる。意味的な構造を見ていくと、まず前件では先行発話の一部を焦点化して、その要素を「～ンジャナイ」により否認しており、後件には否認した要素に変わる対案が提示されている。具体的に言うと、(8-b)は、(8-a)の命題の「安いから」という理由節を焦点化しており、対案として「備蓄用にしようと思ったから」という理由が提示されるという構造をしている。(9-b)も同様に、(9-a)の命題の一部である「優しい」を焦点化し否定した前件と、「優柔不断なだけ」という対案が提示される後件で成り立っている。(8-b)と(9-b)の文が前件のみ発話されたと仮定してみると、提示される情報が十分でない印象であり、「～ンジャナイ」により示す否認判断の後には、否認した要素に変わるものを提示させることが望まれる。本稿では、このように、後件に対案が用意されるという論理構造を対比性があると捉える。

対比性は含意されているものであって、明示的な文として現れない場合もある。

(10)a: 「私が取って置いたケーキを食べたの、あなたでしょう。」

b: 「私が食べたんじゃないよ。」

(10-b)では、ケーキを食べた人物は「私」でないことが述べられているが、否認した「私」の代わりに「私ではない他の誰か」という対案が含意されており、潜在的な対比的論理構造が見られる。また、いわゆるとりたての「ハ」との比較からも、「～ンジャナイ」を含む文が対比性を含意することを確認できる。

(11) a: (玄関にある靴を見て) 「佐々木さんが来ているのか？」

b: 「佐々木さんが来ているんじゃないよ。高橋さんが来ているんだ。」

b': 「佐々木さんは来ていないよ。高橋さんが来ているんだ。」

b'': ?? 「佐々木さんは来ているんじゃないよ。高橋さんが来ているんだ。」

(11-b)と(11-b')の文が意味するところはどちらも、来客は佐々木さんではなく高橋さんであることであるが、「ハ」と「～ンジャナイ」の両方を用いた(11-b'')はそのような意味と受け取ることはできない。とりたての機能を持つ「ハ」と相補的な関係が成立することからも、「～

ンジャナイ」は対比性を含意することがわかる。では、次節では「～ンジャナイ」の持つ焦点化の機能について述べたい。

3-3. 何を否定するか

これまでの考察で、「～ンジャナイ」を用いた否定文では、先行発話などで既出である命題の一部を焦点化して否定するという機能を持つことを見た。本節では、その焦点化された要素の何が否定されるのかを詳しく見ていきたい。

ところで、「～ンジャナイ」に対比性の含意があることは前節で述べたとおりであるが、「～ンジャナイ」を用いた否定文では、後件にどのような対案が示されるかによって、前件で何が焦点化されているのかをより明確にできるという性質がある。このため、「～ンジャナイ」含む文それのみを見るのではなく、後件や先行発話など発話レベルでの考察が必要である。

まずは、否定述語と「～ンジャナイ」が焦点化する範囲について、前件と後件の意味的なつながりからその異なりを確認する。

(12) a: 「安いからってそんなに買ったら無駄だよ。」

b: 「??安いから買わないよ。備蓄用にしようと思ったから買ったんだ。」

b': 「安いから買ったんじゃないよ。備蓄用にしようと思ったから買ったんだ。」

(12-b)と(12-b')の比較からわかるように、否定述語では理由節を焦点化することはできないが「～ンジャナイ」は理由節を焦点化することができる。このような場合は否定述語と「～ンジャナイ」の間に相補的な関係がある。しかし、「～ンジャナイ」が述部を焦点化するとき、否定述語との棲み分けは、焦点化された述語の何を否定するかという問題に発展する。

では、(13)で先行発話の述部を焦点化する場合について見てみる。

(13)a: 「太郎は車を買うの？」

b: 「?? 買うんじゃないよ。太郎は運転免許も持っていないんだよ。」

b': 「買わないよ。太郎は運転免許も持っていないんだよ。」

b'': 「買うんじゃないよ。友だちから借りるんだって。」

(13-b)を見ると、「～ンジャナイ」が焦点化するのには先行発話の述部である「買う」という動詞であるが、(13-b)の否定述語の文が許容されるのに対して、何故「～ンジャナイ」を用いた場合は許容されないのだろうか。(13-b)と(13-b')の後件は「車を買う」という命題全体が否定された「車を買わない」ことを前提とした内容である。この後件が(13-b)の「買うんじゃないよ」という前件と意味的に矛盾していると捉えられるということは、「～ンジャナイ」を用いた否定文は命題全体を否定しているのではないことを示している。では、(13-b)の文で否定されているのは何だろうか。(13-b")の後件では「太郎は車を借りる」という対案が示されているが、この後件から考えると、(13-b")は「太郎が車を手に入れる」という前提は真であるが、手に入れる方法として「買う」のではなく「借りる」のである、という読みが成立している。いわば、命題内容の訂正を表す文であることがわかる。

続いて(14)を見てみよう。

(14)a: 「あの人ってお酒が好きですよ。」

b: 「あの人はお酒が好きんじゃない。あれはもう依存症だよ。」

(14)で焦点化されるのも先行発話の述部であり、「好き」という語を否定することで、上述したように命題内容の訂正を表している。だが、その否定の構造は(13)とまったく同じというわけではない。(14)はある人の嗜好について述べるものであり、話題の性質上、選ばれるのは主観的な語である。さらに例を挙げて考えてみる。

(15)a: 「この映画、面白い？」

b: 「この映画は面白いんじゃない。傑作だよ。」

(15)は、ある映画の評価について述べている。(15-b)は、「面白い」という語が「傑作」という語に訂正される文であるが、ここで否定されるのは、話し手が「面白い」という語について持つ概念が問題となっている事象に適用される可能性であって、「面白い」も「傑作」も映画を評価するという場面ではどちらもプラスの評価を担う語である。つまり、この2つの語は(15-b)の話し手にとって、この発話場面では同じ線状に並ぶ語として認知されるのである。これは(14)でも同様であり、(14-b)の内容において「好き」と「依存症」は「あの人」がお酒好きであることを真として、その程度を表そうとするものである。(14)や(15)のように主観的な表現を担う語を焦点化する場合には、話題となる事象の程度について、主観的な認知の

差異を調整する形式として「～ンジャナイ」が選択されている。

(14)や(15)のような例は「～ンジャナイ」が持つ焦点化による否定の特徴がより明確に発揮された場合と捉えられるが、これらの例はメタ言語否定における尺度の否定に当たると考えられる。まず、メタ言語否定とは何かということであるが、メタ言語否定の定義として、田中(2001)が Horn(1985)の定義を概略したものを引用する。

すなわち、MN [metalinguistic negation: 引用者注] とは、概略、「命題に対しての真偽値的・意味論的演算子ではなく、前言の発話に対して反対する（異議を唱える、否認する）ための装置であり、その際否定されるのは、（命題ではなく）慣習的・会話的含意、発音、形態素、スタイル、使用域などである。」（田中 2001 p.1）

さらに、田中(2001)がメタ言語否定の特徴として挙げるのは、意味的な矛盾が生じることである。

MN と後ろの修正節は矛盾関係 (contradiction) にあるが、それは MN の話し手の意識の中では矛盾ではなく、聞き手 (=先行発話の話し手) にとっての矛盾となる。(田中 2001 p.14)

メタ言語否定の定義と特徴について確認したところで、田中(2001)が尺度の含意 (scalar implicature) として挙げた例(16)と、それを筆者が日本語に訳したもの(17)を挙げる。

(16) a: Is that haggis good?

b: That haggis is not good, it's excellent. (Van der Sandt (1991) 一部改) (田中 2001 p.6)

(17) a: 「そのハギスって美味しいの？」

b: 「ハギスは美味しいんじゃない。絶品なんだ。」

田中(2001)は(16)に関して、言語形式上、'good'にはそれ以下ではないという量の含意が存在するが、(16-b)はその含意を否定していると言う。つまり、ハギスの味の評価の上限を含意した'good'に対して、評価の上限をより高いレベルに持つ'excellent'が提出されるのであるから、評価の上限が否定されたことになり、これを尺度の否定と呼ぶのである。(16)

を日本語に訳せば、(17)のように「～ンジャナイ」を用いることが自然であり、「～ンジャナイ」がメタ言語否定の尺度の否定を担う形式であると言える。

ここで、メタ言語否定の特徴として挙げた、田中(2001)の論の引用について説明を加える。「聞き手に対する矛盾」について、(16)を例にとってみると、次のような論理の流れを確認できる。(16-a)の話し手は、ハギスという料理が美味しいか否かという真偽判断を求めている。その返答として、(16-b)の前件で”That haggis is not good”が発話されるのであるから、聞き手は自身が求めた真偽判断について偽の判断が下されたと理解する。つまり、”not good”を「まずい」に変換し認知するのである。そこに後件の”it’s excellent”が発話されることで、(16-b)が発話が尺度の否定であることが始めて理解できる。これが、聞き手に対する矛盾である。

しかし、上のような説明は(16)のような英語の例の観察からなされたものである。これは日本語の場合でも過不足ない説明であろうか。「～ンジャナイ」には対比性が含意されている。つまり、「～ンジャナイ」の文が発話された時点で、聞き手は対比される文が後件に来る可能性を予測できる余地がある。従って (16)の英語の例のように大きい矛盾は生じにくいと思われる。このことから、日本語では、尺度の否定における「聞き手に対する矛盾」が「～ンジャナイ」によって緩和されていると考えられる。

以上、「～ンジャナイ (カ)」の否定用法における基本的な機能について述べた。「～ンジャナイ」は、先行発話の一部を焦点化し否定する形式である。否定述語を用いた否定文との比較から、「～ンジャナイ」が理由節を焦点化すること等が可能であるという事実を見た。また、述部を焦点化する場合には、焦点化された語が表す具体的な行為や事象ではなく、メタ言語否定における尺度の否定のように、語彙の概念的意味のレベルでの否定を担っていた。従って、否定述語が命題内容の無標の否定を担う形式であるのに対し、「～ンジャナイ」は命題内容の修正を担う有標の否定と呼べる構造である。そして、焦点化された要素が何であるのか、尺度の否定の場合にはその要素のどの意味的側面からの尺度について述べているのかと言った情報は後件に含まれる情報との対比によって明確になる場合が多い。

では、このような機能が推量用法に連続しているのかを考える。まずは「～ンジャナイ (カ)」の推量用法における典型的と言える例を挙げる。

(18)a: 「なんだか空が暗くなってきたね。」

b: 「雨でも降るんじゃないか？」

(18-b)は、先行発話である(18-a)の一部を焦点化しているだろうか。(18-b)の話し手が自身の推測として示すのは「雨でも降る」というひとまとまりの命題であり、「雨」や「降る」のように命題内の一要素を選び取るような必要はない。従って、焦点化という機能は推量用法には見られない。また、(18-b)に対比性の含意があるかという点、話し手は「雨が降る」という命題に対案を用意しているわけではないから、対比性の含意はないと言える。つまり、否定用法の「～ンジャナイ」と推量用法の間には連続性と呼べるような明確な要素は見つからないのである。

4. 「～ンジャナイカ」の意味機能

前節で確認したように、否定用法の「～ンジャナイ」と推量用法との間には連続性らしきものを見出すことはできなかった。しかし、否定用法には「～ンジャナイ」に終助詞や上昇調のイントネーションが付加された形の「～ンジャナイカ」という形式がある。上述したように、田野村(1988)は、否定用法として「～ンジャナイカ」を対象としており、その上で否定用法と推量用法の連続性が強いと述べているので、「～ンジャナイカ」と推量用法の間には何らかの連続性が見出せる可能性は大きいと考えられる。

否定用法の「～ンジャナイ」について、否定する要素を焦点化し、命題全体ではなく命題の部分否定を担うこと、そして否定された要素の対案となるものを後件で示すという対比性の含意を持つことの2点はその意味機能の特徴を表していた。これを踏まえ、「～ンジャナイカ」の意味機能を考察する。では、「～ンジャナイカ」がどのような文脈で用いられるのかを確認するため、(18)と(19)の例を挙げる。

(18)a: 「今日は会議があるから早く行くんじやないのか?」

b: 「違うよ。会議があるのは明日だよ。」

まずは(18)から見ていく。(18-a)が発話される背景を考えると、話し手は、「今日聞き手は会議のため早く出かける」という趣旨の情報を真であると仮定していたことが推測できる。この仮定と眼前の聞き手の行動との間に矛盾が生じたため、自身の持つ情報の真偽を問いかけようとするのが(18-a)である。つまり、「(あなたは) 今日早く行く (という行為をする)」という命題が偽である可能性について提示することで、その真偽判断を聞き手に問いかけているのであるから、「～ンジャナイカ」は命題全体を否定しており、「～ンジャナイ」に見られた命題の一部を焦点化する部分否定ではないことがわかる。

「～ンジャナイ」の意味機能に特徴的だとして挙げた、焦点化と対比性の含意について、焦点化については「～ンジャナイカ」を用いた文には見られないことがわかった。では続いて、「～ンジャナイカ」が対比性を含意するかについて見ていく。

(20) a1: 「その時計いいね。高かったでしょう。」

b: 「これは鈴木さんにもらったんだ。」

a2: 「そう、あなたが自分で買ったんじゃないの。(鈴木さんにもらったんだ。)」

(21)a: (部屋に入ってくる)「あれ、お客さんいたんじゃないのか?話し声がしたけど。」

a': (部屋に入ってくる)「あれ、お客さんいなかったのか?話し声がしたけど。」

b: 「テレビの音だよ。」

(20-a1)の話し手は、聞き手が身につけている時計について、聞き手自身が買ったという前提で「(値段が)高かったでしょう」と問いかけているが、(20-b)で示される「鈴木さんにもらった」という情報によってその前提は否定される。それを受けての発話である(20-a2)は、前提が偽であったことに納得したという発話であり、(20-b)の話し手が時計を手に入れた経緯として、自分で買ったという可能性と、(20-b)の発話において提示された「鈴木さんにもらった」という情報が対比されている。すなわち、(20-a2)には対比性が含意されると考えられる。これに対し(21-a)が発話される状況は次のようなものである。部屋の中から人の声らしき音が聞こえたため、お客さんが来ているとだと思っていたところ、部屋にお客さんがいなかった。そこで、お客さんがいたという命題の真偽を聞き手に確認しようという発話が(21-a)である。この発話に対比される後件を推測することは文脈から見て考えにくく、(21-a)には対比性の含意がないことがわかる。つまり、「～ンジャナイカ」にも「～ンジャナイ」に見られたような対比性の含意はあるものの、その連続性は弱いもので、対比性の含意を持つかは文脈に依存していることがわかった。

また、「～ンジャナイ」と「～ンジャナイカ」を分類し得る形態の差異についても、それが意味機能の差異に通じていると考えられる。まずは(22)に例を挙げる。

(22)a: (店を訪れたが閉店している)「えっ、この店 24 時間やっているんじゃないか。」

a': (店を訪れたが閉店している)「えっ、この店 24 時間やっているんじゃないのか。」

(22-a)と(22-a')を比べると、(22-a')の方が自然な印象を受けないだろうか。「～ンジャナイ

カ」という形式においては、終助詞や上昇調のイントネーションが外側から命題を包み込み、命題を一つのまとまりとして強調する役割も果たしていると考えられる。「～ンジャナイカ」は命題全体についてその真偽を確認するものであり、「～ンジャナイノカ」という形式のほうが「カ」だけが付加される場合よりも、より命題のまとまりを印象付けられるため、(22-a')の方が自然に受け取られる。

5. 否定用法の意味機能 まとめ

以上、否定用法における考察をまとめると、「～ンジャナイ」は否定しようとする要素を焦点化する機能を持ち、命題全体の否定ではなく部分否定を担っていた。さらに、「～ンジャナイ」により否定された要素の対案が後件に示されるという構造があり、このような構造を持つことを対比性の含意があるとして述べた。

そして、否定用法の下位分類としてのもう一種の形式「～ンジャナイカ」は、先行する命題や外界の状況に関して、真偽判断を聞き手に求める機能へと変化していた。真偽判断を求める相手が話し手自身であれば、否定された事象に対して納得したことを示す文としても機能する。「～ンジャナイカ」は、「～ンジャナイ」のように命題の部分否定を担うのではなく、命題全体を否定するものであり、対比性の含意についても、連続性は認められるものの、その結びつきは弱いものである。「～ンジャナイカ」の発話の主眼とは、否定すること自体にはなく、ある命題の真偽判断について述べるのが発話目的となっている。否定用法の2つの形式の論理構造について、(I)に示す。

(I) 否定用法の「～ンジャナイ」と「～ンジャナイカ」の論理構造

「～ンジャナイ」 r ンジャナイ。 qダ。

→ 明示的な文として現れることが多い。

「～ンジャナイカ」 (pダト思ッテイタラ) pンジャナイカ。(qダ)

注：pは命題を、rは命題pの内の一要素を表す。

6. 否定用法と推量用法の連続性

否定用法の「～ンジャナイ」と推量用法との間に連続性がないことについて、3節の終わりでもすでに確認済みであるが、否定用法の「～ンジャナイカ」との間には連続性が見られる可能性が残っている。本節では、否定用法の「～ンジャナイカ」と推量用法との連続性について考察する。

6-1. 形態から見た推量用法

まず推量用法の形態について、否定用法の形態と比較してみよう。

(23) 夫 1 (玄関が開く音がする) : 「佐々木さんが来たんじゃないのか?」〈推量用法〉

妻 : (玄関の方に目をやって) 「いいえ、回覧板みたいですよ。」

夫 2 : 「そうか、佐々木さんが来たんじゃないのか。それにしても遅いな。」〈否定用法〉

(23)を見ると、文末のイントネーションにおける上昇、下降と、否定用法においては「～ンジャナイカ」の「ナ」の部分が高くなるという相違はあるものの、(23-夫 1)と(23-夫 2)の発話はどちらも「～ンジャナイカ」という形態である。また、「～ンジャナイカ」という形を「～ンジャナイカ」という形に変えて発話する場合もあるが、意味の大きな変化はない。この傾向も否定用法の「～ンジャナイカ」と同様である。まずは形態の面から、否定用法の「～ンジャナイカ」と推量用法の間には連続性がある可能性を見た。

6-2. 真偽判断を問う形式としての共通点

否定用法の「～ンジャナイカ」の意味機能について特徴的であったのは、「～ンジャナイカ」を用いた文は否定すること自体に主眼はなく、真偽判断を問いかける形式としての性質が強く見られることと、「～ンジャナイ」からの連続性である対比性の含意が、文脈依存的に認められることである。では、真偽判断を求める形式であるという観点から、推量用法の例を見てみる。

(24)a: 「今日、鈴木さんはいつ来るの?」

b: 「お昼前には来るんじゃないか?」

c: 「そう、じゃあ鈴木さんの分もお昼ごはんを用意しておこうか。」

c': 「わからないなら、電話して聞いてみてよ。」

(24-b)を見ると、鈴木さんがいつ来るかという話題に対して、「お昼前には来る」という話し手の推測について、その真偽判断が聞き手に問われている。この発話を受けて 2 種の返答、(24-c)と(24-c')を挙げたが、(24-c)は、「～ンジャナイ (カ)」の文によって提示された命題内容を真と判断したうえで、お昼前に鈴木さんが来るならば、鈴木さんの分も昼食を

用意しようと述べている。ところが(24-c)は「わからないなら」とあるように、(24-b)の命題内容を偽であると判断している。むしろ、(24-b)の命題内容について、その受け取りを拒否し、情報量をゼロと判断しているともとれる。この2種の返答は先行発話となる(24-b)の真偽について述べるものであるから、「～ンジャナイカ」を用いた文が命題の真偽判断を問いかけるものであるとわかる。

では、共に真偽判断を問いかける形式である否定用法の「～ンジャナイカ」と推量用法の「～ンジャナイ(カ)」の差異はどこにあるのかを見て行く。

(25)a1: 「どうしてヒーターを消したの？寒いよ。」

b: 「暑かったんじゃないの？あなた、赤い顔をしているよ。」

a2: 「夕食でお酒を飲みすぎたからだよ。」

(26)母: (子供が汗びっしょりで帰ってくる)「暑かったんじゃないの？だから帽子を被って行きなさいと言ったのに。」

子: 「帽子を被っても暑いよ。」

(25-b)は否定用法の例、(26-母)は推量用法の例である。(25-b)は、「(聞き手が赤い顔をしているので暑がっていると思ったら)暑かったんじゃないか。」という意味を表す。一方(25-母)は、「暑かったんじゃないの？(暑かったよね?)」という意味である。2つの文の論理構造は以下のように示すことができる。

(II) 否定用法の「～ンジャナイカ」と推量用法の論理構造

否定用法の「～ンジャナイカ」

[(pダト思ッテイタガ) pンジャナイカ?] →「pデナイ」という判断に傾き

推量用法

[pンジャナイカ? (pカ?)] →「pダ」という判断に傾き

(II)で示したように、否定用法の「～ンジャナイカ」も推量用法も、命題が偽である可能性を提示することは一致しているが、否定用法の「～ンジャナイカ」は、話し手が「pダ」と仮定していた事象が覆されたことを前提としているため、「pデナイ」という判断に傾いた発話となる。推量用法にはこのような前提はなく、自身の推測という命題内容について、その真偽を問うものであるから、話し手にとっては自身の推測が真であると判断されること

が期待される。否定用法の「～ンジャナイカ」と推量用法は、どちらも命題の真偽判断を問いかける形式だが、その論理構造は以上のように異なっていることがわかる。

7. まとめ

本発表では、「～ンジャナイ（カ）」という形式における用法間の連続性に着目して考察した。まず、これまで詳細に考察されてこなかった否定用法の意味機能について、形態と意味機能の差異により、「～ンジャナイ」と「～ンジャナイカ」という下位分類が認められることを示した。

否定用法の「～ンジャナイ」は有標の否定を担う形式であり、無標の否定形式である否定述語を用いた用例との比較から、命題一部を焦点化する部分否定を担う形式であることがわかり、さらに「～ンジャナイ」を用いた否定文には、対比性の含意があることを記述した。一方の否定用法の「～ンジャナイカ」には命題を焦点化する機能は見られず、命題全体が否定される。そして、その命題の真偽判断を問うことで、話し手の矛盾や納得を表す形式であることを述べた。

「～ンジャナイ」と「～ンジャナイカ」の意味機能を考察し、この2つがそれぞれ異なった機能を持つ形式であることを示した。2節では、野田(1997)と田野村(1988)の論に、否定用法と推量用法の連続性について見解の相違があることを述べたが、これは野田(1997)が否定用法と見たのが「～ンジャナイ」であり、田野村(1988)が否定用法と見たのが「～ンジャナイカ」であったことに原因がある。

6節では、否定用法の「～ンジャナイカ」と推量用法の連続性について、聞き手に真偽判断を求める形式であるという点を挙げた。また、不連続性については、否定用法の「～ンジャナイカ」は、「p デナイ」という判断に傾きがあるのに対し、推量用法では「p ダ」という判断に傾きがある状態での発話であることを述べた。

以上、これまで推量用法と確認要求用法を対象とした考察では明確にならなかった意味機能や用法間の関係性について記述することができたと思う。

〈参考文献〉

安達太郎(1992)「「傾き」を持つ疑問文 - 情報要求文から情報提供文へ - 」『日本語教育』77号

安達太郎(1999)『日本語研究論集 11 日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 井筒(成田)美津子(2001)「メタ言語的否定再考」『札幌大学外国学部文化と言語』54
- 井上優(1990)「「ダロウネ」否定疑問文について」『日本語学』9-12
- 今仁生美(1993)「否定量化文を前件にもつ条件文について」『日本語の条件表現』益岡隆志編
- 河村道彦(1999)「「は」による対比と「が」による対比」『Ars Linguistica Vol.6』
- 金水敏(1992)「談話管理理論からみた「だろう」」『神戸大学文学部紀要』19
- 金水敏・今仁生美(2000)『現代言語学入門 4 意味と文脈』岩波書店
- 工藤真由美(1996)「「～ノデハナイ」の意味と機能」『横浜国立大学人文紀要 2 語学・文学 43』
- 滝浦真人(1997)「チャレンジコーナー」『月刊 言語』26-12
- 田窪行則(2001)「現代日本語における 2 種のモーダル助動詞類について」『韓日語文学論叢』梅田博之教授古稀記念論叢刊行委員会編
- 田野村忠温(1988)「否定疑問文小考」『国語学』152
- 田野村忠温(1993)「「のだ」の機能」『日本語学』12-11
- 田中廣明(2001)「メタ言語否定について - 話し手の意図と聞き手の解釈 - 」『関西外国語大学研究論集』73
- 田中廣明(2002)「前提取り消し否定とメタ言語否定」『関西外国語大学研究論集』76
- 沼田善子(2001)「とりたての作用域と否定」『筑波大学「東西言語文化の類型論特」別プロジェクト研究結果報告書別冊 日本語のとりたて』
- 野田春美(1997)『日本語研究叢書 9 「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 廣瀬幸生・加賀信広(1997)『日英語比較選書 4 指示と照応と否定』中右実編 研究社出版
- 三宅知宏(1996)「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89
- 宮崎和人(1993)「「～ダロウ」の談話機能について」『国語学』175
- 宮崎和人(1996)「確認要求表現と談話機能 - 「～ダロウ」と「～ジャナイカ」の比較 - 」『岡山大学文学部紀要』25
- 宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』ひつじ書房
- 森山卓郎(1992)「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101
- 吉村あき子(2002)「メタ言語否定の否定対象に関する一考察 - 認知処理プロセスにおける統一的規定の可能性 - 」『奈良女子大学文学部研究年報』44

D.スペルベル・D.ウィルソン(1993) (内田聖二他訳)『関連性理論 - 伝達と認知 - 』研究
社出版